

## 大学生等による不登校児童生徒支援事業3年間の報告

本事業は平成28年度から3年間実施しました。配置校数、配置人数は以下のとおりです。

### 【平成28年度】

小学校 25校 延べ33人配置

### 【平成29年度】

小学校 39校 延べ44人配置

中学校 12校 延べ16人配置

合計 51校 延べ60人配置

### 【平成30年度】

小学校 31校 延べ33人配置

中学校 14校 延べ20人配置

合計 45校 延べ53人配置

### 【3年間の合計】

小学校(3年間実施) 延べ 95校 延べ110人配置

中学校(2年間実施) 延べ 26校 延べ 36人配置

合計 延べ121校 延べ146人配置

本事業のボランティアとして活動した大学生(当時大学生)のアンケートから感想を紹介します。

### 【ボランティア活動にやりがいがありますか?(ありましたか?)】

- 不登校の生徒から手紙の返事が返ってきたり、学校に来て一緒に過ごせたりしたことで、力になれていると感じることができた。また、先生方から感謝していただくことでやりがいを感じられた。
- このボランティアを始め、多種多様な特徴(性格)、個性をもつ児童に出会い、関わったことで、自分自身の視野がとても広がりました。また、その子に合った支援をすることが、その子にとって安心して授業を受けられることや、学習の意欲につながるということも実感することができ、自分自身が教員を目指す上でとても学びになっているので、そこにやりがいを感じています。そして、学校の先生方に「いつもありがとう」と言っていただけでも、自分自身のこの活動の意欲にも繋がっており、先生方にも現場の教員ならではの会話なども聞かせていただき、とてもためになっています。

### 【うれしかったエピソードはありましたか。】

- 「私がいたら頑張って学校に来られる」と言ってくれた児童の言葉から、先生方の援助を

得ながら私が活動してきた意味があったんだなと少し自信をもつことができました。

- 「先生が毎週火曜日来てくれるのがとても楽しみ」と言われたときです。この活動に参加してよかったと心から思いました。自分が学校に行くことを1人でも楽しみに思ってくれている児童がいてくれると感じるだけで来週も頑張ろうという力になります。
- 授業中にわからないことで不安を感じていた児童に寄り添い、サポートを行い、児童がわかったときに「ありがとう」と言ってくれるのがとても嬉しいです。他にも、自分ではノートをなかなかとろうとしなかった児童が、サポートなしで黙々とノートを書いたところを見たときは、その子の成長(変化)が感じられ、嬉しく思いました。

#### 【先生方のサポートで助かったことはありましたか？】

- 担任の先生が、時間があれば話してくださったり、他の先生方が声をかけてくださったりするときは、自分がボランティアの仕方に不安を感じているからこそ、心強く感じます。
- 困ったときや困ったことがなくても、朝に挨拶をした際に困ったことがないか聞いてくださったり、対応で悩んでいる時にさりげなくフォローしてくださったりしたことが本当に助かりました。
- 担任の先生が、クラスの子どもたちに自分のことを紹介してくださり、「わからない時は私に質問をするように」と子どもたちに伝えてくださり、自分が活動しやすいような雰囲気づくりをしてくださっているのがとても助かっています。そのおかげで初めは距離があった子どもたちとも、毎週の活動を重ねることで、深く関わられるようになりました。また、「このクラスでは主に算数の苦手な〇〇さん、△△さんを見てあげてほしい」などと、具体的に教えていただいたりすることで、その子たちを意識して気かけながら支援することができています。

#### 【活動で困ったことはありましたか？(ありますか?)】

- 担任の先生が忙しくて、あまり連携が取りにくいところです。期間が空いてしまった後、小学校に行った際、担当外の先生方に忘れられていたり、前にはいなかった先生がいらっしゃったり、他の先生方との距離がわかりにくいときは困りました。
- 毎回違う学級に回されるので、なじめなかった。
- 活動当初、学生ボランティアのことについて理解がなかったため、自習の監督や体育の審判をさせられたことは困ってしまいましたが、現在は解消されて活動がしやすいです。しかし、忙しい先生方とコミュニケーションを取りづらいことは現在でも少し困るところではあります。

#### 【本事業のボランティア経験が、現在のあなたの生活に役立っていると思いますか？】

- とても役立っています。他県の小学校で養護教諭として勤務していますが、特に児童への関わりの方では、ボランティアでの経験を生かしています。緊張をほぐす時や、話を聞き出す系口として、たわいもない話をするのがボランティア経験のおかげで得意になったと感じています。

- 私は将来、小学校の教員を目指しており、この不登校支援学生ボランティアとして活動できたことは、本当に教員を志す自分にとって貴重な経験です。学校現場は、不登校や学級崩壊などさまざまな問題を抱えていると思います。学生のうちから実際に現場に立ってみて、多種多様な個性をもつ子どもたちと関わったり、それぞれの学級に入り支援をしたり、学校全体の雰囲気を感じたりしたことで、教員になる前に学校現場の現状を知ることができたと感じています。

大学生のスーパーバイズに巡回した臨床心理士から意見を聞きました。

### 【大学生がボランティアとして活動しやすい学校の配慮とは？】

- 1日のスケジュール表があり、コメントコーナーに大学生がコメントを書いて帰る形式は、とても有効であった。またその学級にただ配置するのではなく、何をするのか明確に伝える必要がある。「どこでも良いから入って」は大学生を困らせてしまう。
- 活動終わりに大学生へのフィードバックがないと、不安なまま帰ってしまい、もやもやが残っている。わざわざ時間をとってもらってもないので、終わりに少し話ができると、スッキリして帰り、モチベーションが上がる。
- ボランティアという勉強中の身であっても実際に現場で助けてもらったことについて口頭で「ありがとう」と伝えることが必要。それを伝えることで現場で役に立っていることを実感できるので、ボランティア活動へのモチベーションが上昇する。聞く時間がなくても、交換ノート形式を利用するのも有効であった。
- 当初に活動の意味を説明されていると、ボランティアのやりがいももちやすい。大学生がイメージしている活動と実際の活動にギャップがあっても、学校の状況や、ボランティアが行う活動の意味を説明することで解決することが多かったと感じた。1対1対応のイメージをもっている大学生もいるので、学級全体を支援することの価値、意味について、一言事前に説明があると学生のモチベーションは全く違う。
- コーディネーターがいると、全体が動いている。中学校は別室運営が確立されていることが多く、別室での活動は上手くいくようであった。しかし、対象生徒が欠席の場合はどうするのか、関係の学級に入り何をするのか明確にした方がよい。
- ボランティアを迎え入れる際に全職員に紹介することが必要である。

### 【大学生がボランティアとして留意したらよいことは？】

- 先生の言うことは聞いたが、大学生の言うことをきかないなど、落ち込んで帰ることがあったようだが、先生と話をすることで、気持ちを落ち着けて帰ることができる。情報共有を大切にす。
- 大学生は責任感が強いが、その分、落ち込みもある。先生とは立場が違うのでできることは違うと思って活動する。
- ボランティアの立場で自らが「指導」をしているといった感覚になっている大学生も多い。

「指導者」という感覚よりは、「一緒に過ごす人」といった枠組みで自身を捉える方がよい。

- ボランティア活動で子どもたちと関わっている場合、ボランティア自身の中に学びたいと思う項目が浮かんでいるとは思いますが、○○を学びたいと設定しすぎない方がよい。子どもたちとの関係を楽しむ中で自分の中に感じられるものから学ぶことにも目を向けてほしい。
- 1対1対応の活動イメージが強い大学生は、学級全体の支援になるとそのギャップがしんどそうであった。学級の中での支援の仕方について、事前に準備していく必要がある。学生には、教室での学習支援、集団の中での支援の価値について理解し、自分のできることを探してほしい。